

2011年度受託研究概要報告

平成23年度「第17回神戸ルミナリエ」メインビジュアルの制作

研究メンバー

荒木優子 ビジュアルデザイン学科准教授
高台泳 ビジュアルデザイン学科助教

委託者

神戸ルミナリエ組織委員会事務局

研究概要

平成23年度「第17回神戸ルミナリエ」メインビジュアルの制作に関して、神戸ルミナリエ組織委員会事務局からオリエンテーションを受けた。神戸ルミナリエは、阪神・淡路大震災の犠牲者の鎮魂と、都市の再生と復興への希望を託して、震災の起こった1995年から開催され、以来、神戸の冬を彩る荘厳な光の芸術イベントとして定着してきた。

本年度の神戸ルミナリエは、従来の開催主旨に加えて、3月11日に発生した東日本大震災を受けて、その犠牲者の鎮魂の祈りと復興支援のエールを送る行事としての主旨が盛り込まれていることを伺った。それを受けての今年のテーマ「希望の光/Luci de speranza」の文言と、今年のルミナリエのデザインのCG画像が提供され、それらを使用してメインビジュアルの開発を行うことが条件であった。

研究には、荒木ゼミ、高ゼミの3・4年生が16名参加した。制作プロセスとしては、まず事務局から提供された数点のルミナリエCG画像の中から各自のデザインコンセプトにあわせてメインビジュアルイメージを選択した後、それを加工・編集し、他のイメージ素材や文字要素と一緒にレイアウトして、およそ16点の第一次デザイン案が制作された。それをもって行った9月末に事務局と本学との第一次プレゼンテーションから、震災と復興を人々に訴えかける今年度のデザイン案が選ばれた。そして更なるデザイン修正・検討が加えられ、最終的な平成23年度の「第17回神戸ルミナリエポスター」デザインに仕上げられた。

研究成果

課題は、東日本大震災に意識を向けながら、定着した神戸の冬の観光イベントとしての打ち出し方のバランスをいかに保つかということであった。再生を果たした神戸と、これから復興を目指す東北。東日本大震災の被災者の心情を最もよく知るのには、17年前に阪神・淡路大震災で被災し、復興を遂げた神戸の被災者である。デザインする立場としては、商業的成功は二の次であり、同じ被災民として心情を共にする意思を表してこそ、今日の「神戸ルミナリエ」の開催意義があると考えた。

しかし一方で、冠スポンサーが多く連ねる一大観光事業としての側面も持ち合わせ、主催者側には集客を図る義務があり、依頼された制作物は観光ポスターとしての重要な役割を担っている。今回は、組織の制約の中でパターン化された表現からいかにクリエイティブに脱却するかを考えた。

採用案は、年齢の異なる3人の子どもが「神戸ルミナリエ」を眺めている実写真とCGの合成によるもので、一見ファンタジックな世界に映る。狙いは、従来のパターンにはまった「神戸ルミナリエ」の観光ポスターではなく、道行く人を立ち止まらせ何らかの感情を起こさせ、少しでもテーマである「希望の光」を投影できるようなビジュアルを提示することである。一般的に子どもの自然な表情からは純粹無垢な好奇心や愛くるしさを感じてもらえるだろう。加えてこちらが暗に意図したように、宗教画のイコンを連想させるデザインによって、真ん中の女の子に聖母のイメージを重ね合わせる人もいるかもしれない。優しさと勇気、家族や社会との絆、未来への希望を、ルミナリエを寄り添って見つめる子どもたちに託した。